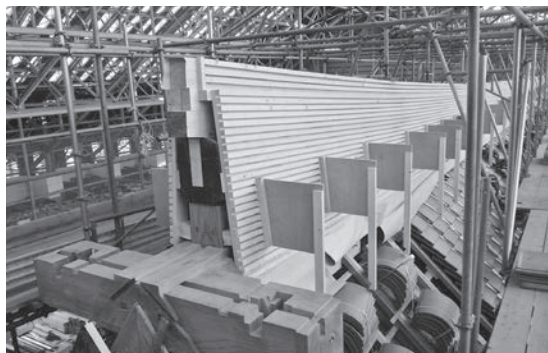




ルーフィング(透湿防水素材の特殊シート)の大棟下地への取り付け作業



大棟の模型を用いた瓦の葺き方の実験



下地が修復された大棟

修復が進められました。また、水で腐食している部分を取り除き、新しい木材で埋め木を行い元の形状に修復しました。
加えて、大棟の南北部分の先端は本来上にそり上がるように伸びていますが、地盤の沈みや葺き上げられた瓦の重みなどにより全体的に十五センチほど下がり、棟としては起った(上方に凸形に反っている)状態になっていました。そのため修復では元々の大棟の下

地部分に新しく木材を付け加え、再建時の反りになるように調整が施されました。
また本誌(二〇一一年十月号)で既報のとおり、これまで阿弥陀堂の素屋根の一角で、大棟の原寸大模型を用いた風雨に対する瓦の葺き方の実験を行ってきました。この実験の結果を受けて、大棟の下地となる部分を補修した後は、「ルーフィング」という透湿防水素材の特殊シートを下地と横棧の

間に取り付ける工法を採用し、またその上に乗せていく鬘斗瓦の勾配を急にして雨水が内部に侵入しにくくなるよう改良します。そして、大棟の先端には「獅子口」と呼ばれる非常に大きな瓦が葺かれており、それを支える「鬼台」の設置も完了しました。今回の工事では明治期の鬼台の上に新しく作成した鬼台を乗せ、下がっていた高さの位置の調整を行いました。

棟

雨水は高いところから低いところへ流れていきます。屋根のほとんどは斜面になっており、瓦も重なっているため雨水が入り込むことはありませんが、屋根の頂上のように風雨の影響を受け易いところは雨水が入り込みやすくなります。そこで、その部分に平瓦を半分にした鬘斗瓦を何枚も重ねて防水性を強化し、上に丸瓦を置いて雨水の進入を防ぐものを「棟」といいます。屋根の頂上のもを「大棟」、大棟からおりているものを「降棟」といいます。その他にも「隅棟」や「稚児棟」といった棟があります。

横棧

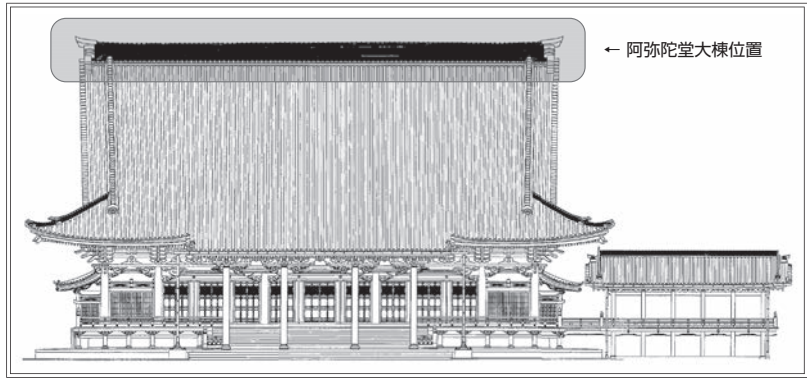
大棟に取り付ける「鬘斗瓦」を支えるための下地となる部分。ここに釘と銅線を置いて鬘斗瓦を段上に積み上げていきます。



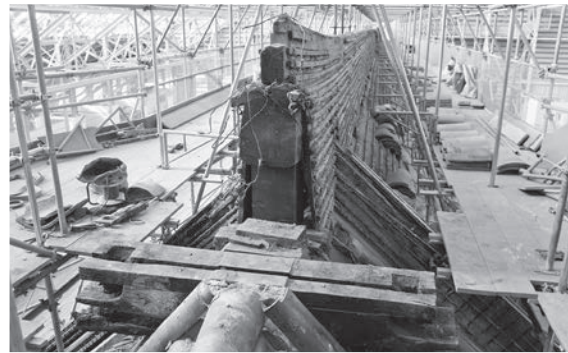
御修復のあゆみ

く 伝承された先達の願い

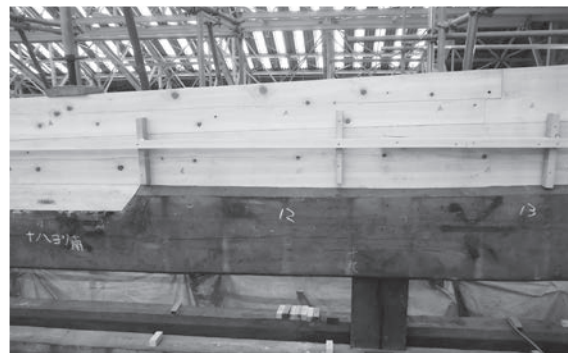
阿弥陀堂の屋根改修工事



← 阿弥陀堂大棟位置



修復前の大棟



大棟の下地部分



鬼台(大棟の先端にある「獅子口」を支える台)を取り付けています

阿弥陀堂では、屋根の下地となる土居葺き板の改修をほぼ終え、順次瓦が葺き上げられています。中でも現在は、その屋根の頂上部分である大棟(地上約二十七

メートル付近)の修復工事を進めています。
大棟は明治度の再建から約百二十年もの長い年月を経た中で、全体的に東面に湾曲していることが

修復にあたっての調査で確認されました。そのため、湾曲している箇所突出部分を削り、減退している箇所には埋木を行うなどして、棟が適切な曲線となるように